謙澄を巡る人々

題字
棚田看山

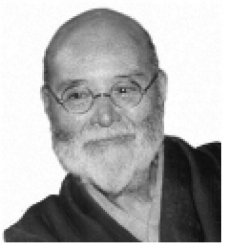
その２

高橋是清

～教えあい、学びあった親友～

上稗田村の私塾水哉園で学んだ末松謙澄は、明治４年、17歳にして青雲の志を立て上京し、佐々木高行侯爵（土佐出身）の書生となる。英語を習うため宣教師のフルベッキ邸に通う佐々木家の令嬢のお供をする謙澄は、そこに居た１才年上の高橋是清（これきよ）と話すうちに意気投合する。謙澄は合格していた難関の東京師範学校官費生をも辞退し、二人で交換教授を始める。是清が英語、謙澄が漢文を教え合ったが、もともと漢文の素養の高い謙澄の英語の習得は、是清が驚くほど早い上達だったという。二人はフルベッキに届く英・米の新聞を借り、是清が翻訳口述し、謙澄が新聞に相応しい文章にして、日本の新聞社に売り込み、生活費を稼いだ。

実は、高橋是清は11才の時、仙台藩の命令で横浜に出て英語の学習塾（ヘボン塾）に入り2年間学び、さらに藩命により14歳で渡米した。ところが、契約上の手違いから奴隷として扱われ、いくつかの家を転々とする間、英語の会話と読み書きの能力を習得。帰国後、教官助手や書生をしていたが、是清がフルベッキ邸で謙澄と出会ったのはこの時期であった。



是清はこの時代の人としては珍しく欧米人と対等の議論ができる英語力を身につけており、その後も官僚、国際金融・財政家、政治家として活躍し、波乱万丈の人生を歩むことになる。なかでも日本銀行副総裁時代、日露戦争の戦費調達という重大使命を帯び、ロンドンでその調達に苦心する。米国の銀行家でドイツ系ユダヤ人シフ氏の全面協力を得た是清は、６回の外債発行で総額１億３０００ポンドの戦費調達に成功する。この時謙澄は密命を受け独自にイギリス各地を講演し、新聞・雑誌に寄稿して、日本の立場を説明するとともに良好な対日世論の形成に努めた。親友是清の側面支援を成したのである。

高橋是清はペリーの黒船来航の翌年に生まれ、日銀総裁、蔵相７回、首相１回を務め、その風貌と七転び八起きの人生から「ダルマさん」と慕われた。昭和11年二・二六事件で死去するまで、大震災、昭和金融恐慌、世界恐慌など次々起こる国難を卓越した実務能力と果敢な決断で乗り越えた不世出の指導者であった。

（文化人末松謙澄を考える会　濱田輝夫）